

## 〈 1. 書評論文・レビュー論文 〉

### 1-2. ノスタルジーの文化社会学

浅岡隆裕『メディア表象の文化社会学——〈昭和〉イメージの生成と定着の研究』  
(ハーベスト社、2012)

笹部 建

#### 1 はじめに

1990年代に端を発し、2000年代から隆盛した、昭和という時代イメージをめぐるノスタルジー・ブームには、これまで肯定的にせよ否定的にせよ、様々なことが語られてきた。そのブームの裏側で隠蔽される事実や政治性、あるいは歴史への想像力の欠如に対して警鐘を鳴らす研究は様々に行われてきたが、本書はそのブームのなかでの昭和イメージの語られ方そのものを対象としている。そこから導き出される結論は、「日本人が劣化している」という言説との親和性であり、著者はそれらの言説の関係を、雑誌などのマスメディアや、博物館などの空間的なメディアに現れる表象の中から洗い出していく。

本稿では、ノスタルジーという社会の中に現れる感情機制<sup>1</sup>を対象とした従来の社会学的研究の潮流の中にその意義を位置づけ、そこから現代の文化事象を社会学的に扱うことが、如何にして可能であるのかを考えてみたい。まず2章では本書の概要を述べ、3章ではその評価を提示する。本書は前半部が理論編、後半が事例編となっているのだが、前半部の理論検討には意義があるものの、そこで検討された言説分析という手法が後半部の事例分析に上手く当てはまっていないのではないかという、評者の疑問点が併せて述べられる。

そして4章では、前章の議論を踏まえた評者なりの文化社会学のあり方が問われることになる。1990年代以降のカルチュラル・スタディーズの展開により、社会学内部でも現代の文化事象を扱う際の方法的な構えは様々な議論されてきた。4章の1節ではそのようなカルチュラル・スタディーズの展開

1 もともとギリシャ語の *nostos* (帰省) と *algia* (苦痛) の接合として生まれたノスタルジーという用語は、17世紀のスイス人傭兵たちの身体的不調を表す病理学用語として軍医らに定義された (Davis 1979=1990)。この時点では外地に臨む傭兵たちに見られるような、他郷において故郷を想うという情動 (郷愁=ホームシック) から出発していたノスタルジーは、やがて近代人の家郷喪失者 (Berger 1973=1977) としての存在論的不安によって、特定の過去化された空間 (故郷) ではなく過去そのものに対する憧れや親しみを指す用語として定着した。

以前のディシプリンに回帰する動向と、それを踏まえて新たな反省的な記述を行おうとする動向を比較し、後者の中に現代の文化事象を対象とする文化社会学固有の意義があることが指摘される。そして2節では、実際にその観点から本書の議論がどのように見直されるかが述べられる。そこでは現在の昭和イメージをめぐるノスタルジーの独特の中途半端さを反省的に記述することで、その特性を導出することが目指される。

## 2 本書の概要

本書は全10章編成中、冒頭の「はじめに」と1章で問いの所在が確認され、2～5章の理論検討、6～10章の具体的な事例の分析を通して、著者の結論——すなわち昭和30年代ブームと日本人劣化言説の関係性についての指摘——が提示される。

### 2.1 問題関心と理論検討（前半部）

本書は昭和期という時代を対象にするとはいえ、現在に遺る当時の資料にあたって歴史的な社会変容の分析を行うのではない。つまり、「昭和という時代そのものを問題化するのではなく、それが現代においてどのように語られているのかを検証する」（本書：1）。社会的記憶は想起されるたびにその都度再構成される、という構築主義的な前提をとりつつ、2000年代から特に日本社会で流行している昭和をめぐるノスタルジー・ブームについて考えていくことが示される<sup>2</sup>。この昭和イメージの氾濫から、著者は2つの問いを設定する。すなわち、①なぜ現代においてノスタルジックに語られるのは「昭和」という特定の時代で、それも「30年代」などのごく限られた時期に収斂していくのか。②「昭和30年代」の実体験を持っていない若い世代にも、現代のノスタルジー・ブームがある程度受け入れられているのはなぜか。

これらの問いに答えるため、著者はメディアによって表象されたメッセージ群＝メディアテキストを対象に分析を進めていくことを述べる。それはそもそもメディアというものが、ある特定の記憶の想起を促す性質を持ち、現代においてその影響力は（とりわけ昭和期を体験していない若い世代に対して）増大し続けていると考えられるからである。著者によれば、そのようなメディアの中のイメージを包括的に論じるためには、「送り手の意図から始まり、それが受け手にどのように受容されていったかの一連のプロセスを探求」することが必要となる（本書：49）。このために必要とされるのが「解釈共同体」という概念である。これは〈一つの共通的な解釈の地場〉（本書：54）と定義され、その生成プロセスと変容を見ることで、メディアの送り手・受け手相互のイメージの構築過程を追尾していくことができるとされる。

ではそのイメージが表象されるメディアテキストを対象にする場合、どのような分析が可能となるのか。著者は従来のメディア研究でなされてきた内容分析などの定性的研究に限界を感じると述べ、代わりに言説分析を手法として採用する。言説分析は素朴な内容分析と区別され、テキストの外部に

2 2003年の『AERA』（4月号）や2006年の『文藝春秋』（5月号）などの雑誌特集、2001年からの大分県豊後高田市の取り組みなどにみられる商店街の再生や活性化、新横浜ラーメン博物館（1994～）や台場一丁目商店街（2002～）などのテーマパーク、さらには『ALWAYS～3丁目の夕日～』（2005年公開）を代表とする映画作品などで、度々昭和期のイメージがフューチャーされてきた。特に『ALWAYS』は当時の総理大臣であった安倍晋三が自著『美しい国へ』（2006）の中で肯定的に取り上げたのも手伝って、話題となった。

当たる「意味の生成と解釈が行われる際の社会的かつ歴史的な文脈の問題を重視する研究」と定義づけられる（本書：88）。とはいえ、言説分析も「局地的」であることや「解釈結果の信頼性」等の弱点が存在するため、「出来る限りたくさんのメディアテキストに当たり、それぞれの言説付置を確定」させ、さらに「それらテキスト間の相互関係（前後関係と横断の関係の両側面）や、メッセージの受け手＝送り手の意図性を、そのアウトプットとしてのメディアテキストとリンクさせた上で、構造的特性を明らかにしていく作業が必要」であるとされる（本書：92）。

## 2.2 事例分析（後半部）

前節で述べたような理論検討の後、本書の後半部では具体的な事例として、雑誌メディアの中における言説としての「所得倍増計画」（6章）や「昭和30年代ブーム」（7章）が、また百貨店の企画展示（8章）や地域の博物館展示（9章）に見られる昭和イメージの構築過程が、さらには昭和イメージのノスタルジーと、「日本人劣化言説」と呼ばれる他の言説との付置関係（10章）が分析される。

例えば7章では、昭和30年代について語る体験者たちの中でも、それが肯定的か否定的か、またはその性質が現代社会との関連の上で語られているか否かで区分することができ、それぞれの解釈共同体においてその言説が異なることが述べられる（本書：169）。また昭和30年代を舞台とする映画『ALWAYS～三丁目の夕日～』のプロデューサーや映画監督などの制作スタッフたちの語りから、制作にあたって綿密な時代背景の検証や調査が行われたにもかかわらず、映画に映るあらゆるものを古く見せるために様々な映像の加工が施され、また“昭和っぽい顔”をした俳優が選ばれるなど、イメージそのもののリアリティを求めた結果、実際の昭和30年代から矛盾・倒錯を生んでいることが指摘される（本書：178-9）。

また9章では、博物館が1つのメディアとしてみなされ、愛知県師勝町（現・北名古屋市）の歴史民俗資料館と福井県歴史博物館を事例に、常設展示されている昭和30年代に関する資料と学芸員へのヒアリングを通して、そのイメージが展示を通して如何にメディアテキスト化していくのかが述べられる。そこでは「資料が単に懐かしいという感覚からのみ、もてはやされるのではなく、昭和の私たちの生活を記録する重要な資料になる」といった、「記録・保存」という動機から収集が始められたことが語られながら、館内の展示物は「説明がほとんど皆無」であり、受け手に「〈意味の不在〉を補うように期待」されていることが示される（本書：231）。

そして最後の章では、現代社会において「日本人ないしは日本社会が“劣化”している」という語りが蔓延しており、この「劣化言説」の付置状況についての調査（webによる質問調査）から、現在の昭和イメージの氾濫は「日本人全体の価値観が変動しつつある中で、1つのオルタナティブとしての昭和の生き方が、ある世代にとっては『新しい』ものとして、またある世代にとっては『懐かしい』ものとして脚光を浴びて来ている」という結論がなされる（本書：261）。

以上が本書における構成の概要となる。全体として、前半部の解釈共同体や言説分析などの理論検討を、後半部の言説としての「所得倍増計画」や博物館展示などの個々の事例分析に活かしていく構成をとっており、そのような事例の総体としての昭和30年代ブームが、日本社会における「劣化言説」と親和的であるということが指摘されていると言える。

### 3 本書の意義と疑問点

以下では本書の従来の先行研究に対する評価の位置づけと、本書で提示された問題感心に対する著者の答え（解釈）とその答え方（方法論）に対する疑問点が2節に分けて提示される。

#### 3.1 本書の意義

「昭和30年代ブーム」に関しては、既に当時の統計データやCM映像などのアーカイブを対象に、実証的にその社会状況を捉えようとする研究がある（高野・難波編 2010；橋本編 2010）。これらは現在において新たに発掘された過去（＝昭和30年代、あるいは1960年代）の資料から、現在のステレオタイプ化された昭和30年代に関する語りを相対化させる、考古学的な歴史研究の成果として結実している。それに対して本書は、昭和30年代についてのステレオタイプ化された語りそのものを対象に、そこからどのような現代社会の「構造的特性」（本書：92）が導き出せるのかを見ようとしており、それゆえ扱われるのは過去の歴史資料ではなく、あくまで2000年代以降の言説群である点にオリジナリティがあると言えよう。

また、「昭和30年代ブーム」に限らず、1990年代以降のメディアの中のノスタルジーに関する先行研究は、主にカルチュラル・スタディーズの中でかなりの蓄積がなされてきた（阿部 2001；岩渕 2001）。例えば阿部はテレビ番組を事例に、そこにみられる「ナショナルなもの」を構築するノスタルジーについて言及している。テレビ番組の『電子立国 日本の自叙伝』（NHK 1991）と『プロジェクト X』（NHK 2000～2005）を比較し、共に日本社会のテクノロジーの発展を賛美する点では同じだが、後者においては「官民一体」のプロジェクトというテーマが強調されている点で異なることが指摘される（阿部 2001：174）。「民間の成功物語」として表象された『電子立国』から、『プロジェクト X』における「国家と民間の合作による偉業」という内容の変化を、阿部は1990年代以後失われた「ナショナルなもの」への感情投射であると述べている。また岩渕は、1990年代の日本における他のアジア諸国に対するノスタルジーに、文化の権力作用を読み取っている（岩渕 2001：262-300）。当時の雑誌記事などで表象されるタイのリゾートのウェイトレスは純真無垢な存在として表象されており、そこでは男性主義的かつ帝国主義的なまなざしが垣間見られ、またテレビドラマやコマーシャルにおける香港のポピュラー・カルチャーやヴェトナム人の表象には、90年代後半のバブル経済崩壊以後の「近代化・産業化の活力へのノスタルジア」がオリエンタリスト的な想像力によって成り立っているとされている。

ただ、これらのメディアテキストに関する研究の蓄積は一定の成果を上げてきたものの、そこで観察されているノスタルジーを生み出す権力作用そのものについては、あまり明確に説明されないという批判がある（石井 2007：129）。権力とは、何かを説明する概念というより、それ自体どのようなものであるかを鋭く問わなければならない被説明要因であるため（盛山 2000）、その存在を確認するのみでは今一步物足りないというわけだ。そのため、本書では「その言説が変化していくことを説明する際には、国家や資本的権力関係という単純かつ素朴な変数の説明図式は採用しない」と述べられ（本書：135）、代わりにメディアの中の一連のイメージの構築過程を「解釈共同体」の概念の導入によって丹念に追尾しようとすることで、分析の精度を上げようと努めている点に意義があると思われる。これは言い換えれば、従来のカルチュラル・スタディーズにおける、マクロなレベルの権力批判では

なく、ミクロなレベルで昭和イメージがメディアテキスト化する際の過程を実直に見ようとしていると言えるだろう。それによって、著者は他の東アジアの他者性を強調する1990年代のノスタルジーとは一線を画す、2000年代以降に顕著となる「昭和30年代ブーム」の展開を説明しようとしている。

以上が本書の評価となる。だが、本書には見過ごせない問題点もあるように思われる。

### 3.2 本書の疑問点

最も大きな疑問として、昭和イメージの構築過程を分析するための方法として、なぜ「言説分析」という手法が選ばれたのか、最後まで評者は分からなかった。言説分析という手法に関しては社会学内部でもいくつかの立場に分かれるが（佐藤・友枝 2006；赤川 2006）、著者が直接に依拠しているのは社会構築主義（とりわけコンテクスト派と対立する厳格派）の立場をとる、赤川学の定義する「言説分析」であると書かれている（本書：71）。だが、赤川にとっての言説分析はなによりも「歴史社会学」としての方法であるはずで、それは歴史研究を目的とせず、あくまで現代社会の構造を見ようとする本書の意図とは合致せず、手法として適切ではないように思われる。

むしろ本書は、赤川や佐藤俊樹が言説分析と区別している知識社会学的なイデオロギー分析に読めるような部分が多々あった。例えば7章における、昭和30年代ブームの実体験者たちの語りを、肯定／否定の軸と現代社会の関連性の有無の軸とで掛け合わせた分類表（本書：169）などは、とても知識社会学的な整理に見える。

この本書における言説分析とイデオロギー分析の混濁が最も問題として表れているのは、結論部分である10章の「昭和30年代ブーム」と「日本人劣化言説」との親和性の指摘においてである。そこでは「劣化と関わるものがメディア言説などにより流布し、人口に膾炙するようになった。それとあまり時間差なく、昭和ノスタルジアブームが起こっている」ことから、「劣化し始める以前の日本人らしさというもののイメージが、昭和30年代に求められたのではないか」と述べられている（本書：259）。

2.1で述べたように、本書は現代のノスタルジー・ブームについて2つの問いを立てていた。すなわち、①なぜ過去一般の中でもとりわけ昭和30年代がクローズアップされるのか。②昭和30年代を体験していない若い世代にもブームが受け入れられるのはなぜか。これが著者の問いであった。

実証主義的な立場をとる者は、「安保改定」などの公的政治状況の変遷や、「高度経済成長」による、私的生活上の耐久消費財の普及などを歴史的事実として述べ、昭和30年代の他の時代に対する客観的優位を示そうとする。かの時代は客観的に見て「黄金時代」であったがゆえに、実体験を持たない若い世代にもそのイメージが、言わば弾丸効果的に影響しているのだと。一方、構築主義的立場の者たちは、現代のブームは消費社会の中で生み出された一種の共同幻想に過ぎないと述べる。そして実証主義者たちが述べるほど若い世代は素朴にその幻想に浸っているわけではなく、むしろ積極的にその「想像のノスタルジア」（Appadurai 1996=2004）を楽しもうとしているのだと。ここでは前者の②の答えに対する反論として、受け手の能動的解釈が強調されている。だがブームによって対象化される

3 「ただ私は言説分析を、フォーコーに立ちかえりつつ、歴史社会学の一手法として確立させたいと願っている」（赤川2009: 55）。

4 現代との関連性の有無という軸は、ほぼマンハイムのイデオロギー概念と同じであるように評者には思われた。肯定的にせよ否定的にせよ、実体験者たちの（現代社会とは切り離された）素朴な過去（自らの幼少期）についての語りは部分的イデオロギー、そして現代との関連においての語りは全体的イデオロギーの概念に対応すると考えられる。

時代が消費社会の中の記号の一つに過ぎず、必然性のないものなのであれば、①の問いには実証主義者たちのように明確には答えられないこととなる。そこで著者は別の言説である日本人の「劣化言説」を持ち出し、「日本人の劣化の直前期として昭和30年代がみなされているからこそ、過去一般ではなく、かの時代がノスタルジックに語られるのだ」というかたちで①の問いにも答えようとしている。

だがこの「昭和30年代が客観的に『黄金時代』であったかどうかは分からないが、昭和30年代以降に日本人が劣化しているという言説は客観的に取り出すことができる」という筆者の結論は、遠藤知己の言う「客観性の一段ずらし」（遠藤 [2000] 2006）になっているのではないか。ある言説の生成や変容を述べる際に持ち出すものが、社会の構造変動であろうと別の言説であろうと、それはなんらかの実体的な外部にその言説が依存するということになり、本来言説という言葉が含意する、意味の散発的な広がりや、複層的な断続を無視する結果になってしまう。言説として統一すべき対象を、一方をテキスト（「昭和30年代ブーム」）に、他方をコンテキスト（「劣化言説」）に恣意的に割り当てることは、本来的な意味での言説分析として成立していないことになる（赤川 2006）。言い換えれば、言説自身の曖昧さを別の説明要因で厳格化させようとする、それは言説を分析したことにはならず、イデオロギー分析やテキスト分析というかたちを取るようになる（佐藤 2006）。しかしこの考え方をとれば、「劣化言説」が日本人の自己アイデンティティをめぐる言説である以上、日本社会におけるナショナリズムが背景となっていることは明白であり、それに関連するものとして昭和30年代ブームを位置づけるということは（そこにカルチュラル・スタディーズのように権力作用を読み取ろうと読み取るまいと）、「国家」というマクロなレベルで対象を分析の俎上にのせたことに等しい。それは筆者自身が「単純かつ素朴な変数の説明図式」と呼んでいたものではないだろうか。

以上が本書に対する評者の疑問点である。分析枠組みとして言説分析を採用することの整合性と、分析結果の解釈（「昭和30年代ブーム」と「劣化言説」の親和性）に対する妥当性という2つの論点に対し、ここでは疑問が提示された。

## 4 評者の議論

本書は、その題名が「メディア表象の文化社会学」となっているように、現代のノスタルジー・ブームをめぐる、考古学的な歴史研究でもなく、また文化実践の中の権力作用を問うカルチュラル・スタディーズでもないようなかたちで議論がなされていた。前章ではその方法と結論に対し疑問が提示されたが、では著者の議論に代わる、どのような別の考え方が他にありえるのか。以下ではこの問題を文化社会学的にどのように考えられるかが述べられたあと、実際にその観点から現代のノスタルジー・ブームを評者なりに考察してみる。

### 4.1 現代の文化事象を扱う際の諸問題

本書以外にも、1990年代以降のカルチュラル・スタディーズの隆盛を踏まえ、自らの立場をそこの距離感から測るような議論はいくつか見られる。

例えば大野道邦はカルチュラル・スタディーズの展開を「社会的なもの」の後退として捉え、シンボル・表象のシステムとしての「文化的なもの」が「社会的なもの」そのものを説明するような自律性を有するとみなされるようになったと述べている（大野 2010）。また、長谷正人は戦後の日本の社会学でそれ以前の構造機能主義に代表されるシステム理論が大きな位置を占めていた時期から、1980

年代からの「ポストモダン」と呼ばれるようになって以降の社会学は「文化」がその中心的テーマとなっていたという厚東洋輔の指摘を引き、さらには1990年代以降のカルチュラル・スタディーズや構築主義的な社会学理論の展開もその延長線上に位置づけられると述べている（厚東 1998；長谷 2002）。

大野は後期パーソンズの理論などから、文化が政治や経済などの社会現象から自律した原理であり、むしろそれらを説明するような独立した現象であることを強調し、そうすることによってディシプリンとしての文化の社会学をカルチュラル・スタディーズの批判を取り入れつつ再構築できるのではないか、という立場をとる（大野 2010：29-30）。そこで文化の自律性を強調したカルチュラル・スタディーズが評価されつつ、それが人々の実践に着目する能動性・主体性を持ったものであるため、ディシプリンとしての社会学はその反対に客観的な「構造」として文化を捉える必要があり、そのためには後期パーソンズのシステム理論やレヴィ＝ストロースなどの議論に見られるような、抽象的かつ一般的な意味で文化を原理的に把握することが必要であると述べられる（大野 2010：16-7）。

ただ、大野の言うように文化を原理的な意味で把握することは重要と思われるものの、それをどのように経験的な分析として取り入れていくのかはそこでは説明されない。また、大野が分析する歌舞伎のように、伝統的で歴史的な文化事象であるならば、一般化・抽象化された文化概念でもって社会学的に考察することは可能かもしれないが、それが多様かつ複雑な広がりを持つ現代の文化事象をどのように捉えることができるのかという疑問も残る。

これに対し、長谷の立場は現代に至るまでの文化の窮状を歴史的に記述することが重要であると述べる。「現代の文化の窮状が、人びとのいかなる日常離脱的な欲望のもとに作りだされ、それがどのように空虚さの余韻を残すものへと変貌してきたのか。その（近代というよりは）ポストモダン文化の歴史が辿った隘路のプロセスを描くことがいま私たち社会学者に要求されているのではないか」（長谷 2005：25）。長谷によれば、ポストモダンの到来と呼ばれた1980年代には消費社会の中のサブカルチャーを軽やかに論じる議論が多くあったが、その政治性や暴力性を批判したのが1990年代以降のカルチュラル・スタディーズであった。しかし現代の文化事象をそのように政治的な問題として捉えるのではなく、長谷は「1970年代以降のポストモダンの消費文化の偶発的な歴史の積み重ねとして捉え直」すことが必要であると述べる（長谷 2005：27）。

長谷の立場は一見大野のような理論的問題からは離れてしまっているように見えるが、別の議論を補助線として入れれば理論的な問題としても読めるように思われる。例えば多田光宏は「文化的なものが社会的なものに先行するのではなく、社会的なものが文化的なものに先行する」という、大野とは真逆の立場を取り、ルーマンの社会システム論から文化を「社会システムの記憶」とであると定義する（多田 2011）。この多田の定義を借りれば、長谷の言う「文化」とは社会の記憶を指し、それを歴史的に記述することとは社会システムの作動による記憶の累積と、それを利用して「さらなる作動の整合性の手がかりとして自己準拠的に再利用する」という、社会システムの一連の作動の過程を記述するものであると言えるのではないだろうか。

ではこのような立場の場合、まさに社会的な記憶をめぐるブームであると言えるノスタルジー・ブームを現代の文化事象として考えたとき、どのような考察が可能となるのか。

## 4.2 ノスタルジーの文化社会学

2000年代以降の現代と昭和30年代がどのような関係にあるかを見たとき、それは高齢化が叫ばれつつも、現代において当時の実体験者たちが未だ多くいる時代、ということになる。それゆえ昭和30年

代についての個人的・局域的な語りが蔓延しつつも、歴史研究の中で客観的な資料や証言が、約半世紀という時間の堆積から新たに発掘されつつもあるという、時間的な二重性を帯びることになる。この現在の局域化された語りの乱立と、当時の希少化された証言の発掘とが同時進行することによって、昭和30年代のイメージには画一化・均質化の困難性が現れることになる。

それゆえ、現代のノスタルジー・ブームは、そのイメージの独特の中途半端さや粗雑さにおいて特徴的であるように思われる。例えば「昭和30年代」と言いながら、実際は昭和40年代のイメージが流用されていたり（北田 2011）、『ALWAYS～三丁目の夕日～』のような分かりやすい単純さを持った映画作品とは別に、『パッチギ！』（2005）や『フラガール』（2006）などのような、一元的に美しく記号化された過去に対抗するかのようなものもいくつか見られたりした（角田 2010）。記憶というものはしばしば喪失したことすら社会的に忘却されるものだが、その意味では昭和30年代の肯定的な記憶のみが構築され、無害な記号として繁茂しているというよりも、その内実はどうあれ、「何かを失った」ということだけは忘れないでおきたいという、安心感だけがフラットに広がっていると言える（遠藤 2010）。昭和30年代とは、何かを忘れたということすら忘れる、ということのないようなかたちで、中途半端に想起され続けている対象なのだ。

そう考えていくと、改めて本書の第8章で分析された博物館の常設展示での「昭和」コーナーの事例に興味深い点があるように思われる。そこには展示物に対する説明文がなく、また学芸員も「ぼくが説明するよりみなさんの方がよく知っている時代のものが並んでいるので。」と述べ、展示物の説明をすることがほとんどないという（本書：218）。正史としての保存や記録が収集の動機でありながら、その展示（表象）のあり方としては、むしろ受け手側に記憶のリテラシーで情報を補うことが求められるという、独特の中途半端さがここには現れている。言い換えれば、「みんながよく知っている時代」についての展示物に、わざわざ説明文を付与することの意味のなさは説明されていても、そもそも「みんながよく知っている時代」をわざわざ展示することの意味は不在のままである。ここでは荻野昌弘が述べるような、未知なるモノをミイラ化して保存し、収集しておこうとする近代の「博物館学的欲望」による秩序化が、言わばその一歩手前で留まり、決して完結しないという事態になっている（荻野 2002）。喪失を想起し続けるための装置である現代のノスタルジーは、ミイラ化＝表象の秩序化を完遂できない。そこにはテーマパークほどの一貫性は存在せず、実体験者も若者も、共に決して画一化されない何かを想起できるようなかたちで、ノスタルジックに記号化されたキッチュなモノたちに囲まれることになる。

そしてそこに読まれるべき正史が存在しない以上、来館者たちには語り合いが奨励され、沈黙と鑑賞ではなく、饒舌と交流が期待される（「大きな声で会話しながらご見学ください」（本書：218）。これは来館者同士のコミュニケーションが広がる場であると同時に、その展示物が醸し出す記号＝懐かしさに共感できない者や、昭和の知識や体験が全くない者からすると内閉的なものに映るだろう。その内閉的なノスタルジーの場がテーマパークであるならば出て行けばいいだけの話だが、そこが具体的な都市や歴史的な博物館であるとき、何らかのかたちで社会的・歴史的な「共感による排除の論理」が働いているとみなすことができるかもしれない（鈴木 2011）。

以上のように、昭和ブームの中途半端さの只中から、そこから生じる記憶や歴史の問題を捉え、反省的に記述していくことが、文化社会学的にノスタルジー・ブームを考えていくことなのではないだろうか。



【参考文献】

- 阿部潔, 2001, 『彷徨えるナショナリズム——オリエンタリズム／ジャパン／グローバリゼーション』世界思想社。
- 赤川学, 2006, 『構築主義を再構築する』勁草書房。
- , 2009, 「言説分析は、社会調査の手法となりえるか」『社会と調査』3: 52-8.
- Appadurai, A, 1996 *Modernity at Large :Cultural Dimensions of Globalization*, University Minnesota Press.  
(=2004, 門田健一訳, 『さまよえる近代——グローバル化の文化研究』平凡社.)
- Berger, P, Berger, B, and Kellner, H, 1973, *The Homeless Mind: Modernization and Consciousness*, Random House. (=1977, 高山真知子・馬場信也・馬場恭子訳, 『故郷喪失者たち』新曜社.)
- Davis, F, 1979, *Yearning for Yesterday : A Sociology of Nostalgia*, Free Press, (=1990, 間場寿一・荻野美穂・細辻恵子『ノスタルジアの社会学』世界思想社.)
- 遠藤知巳, 2000, 「言説分析とその困難——全体性／全域性の現在の位相をめぐる」『理論と方法』15 (1): 49-60.  
(佐藤俊樹・友枝敏雄編, 2006「言説分析とその困難(改訂版)——全体性／全域性の現在の位相をめぐる」『社会学のアクチュアリティ5 言説分析の可能性——社会学的方法の迷宮から』東信堂, 27-58.)
- , 2010, 「序論 フラット・カルチャーを考える」遠藤知巳編, 『フラット・カルチャー——現代日本の社会学』せりか書房, 8-49.
- 橋本健二編, 2010, 『家族と格差の戦後史——1960年代のリアリティ』青弓社。
- 長谷正人, 2002, 「「文化」のパースペクティブと日本社会学のポストモダン的変容」『文化と社会』第3号56-73.
- , 2005, 「文化の社会学の窮状／可能性」『年報社会学論集』18: 16-27.
- 石井清輝, 2007, 「消費される「故郷」の誕生——戦後日本のナショナリズムとノスタルジア」三田哲学会『哲学』117: 125-56.
- 市川孝一, 2010, 「昭和30年代はどう語られたか——“昭和30年代ブーム”についての覚書」『マスコミュニケーション研究』76: 7-21.
- 岩淵功一, 2001, 『トランスナショナル・ジャパン——アジアをつなぐポピュラー文化』岩波書店。
- 北田暁大, 2011, 「終わりなき日常の憂鬱——補遺 あるいは続編のためのノート」『増補 広告都市・東京』ちくま書房, 176-215.
- 厚東洋輔, 1998, 「総論 社会学の理論と方法 日本の社会学の戦後50年」高坂健次・厚東洋輔編『講座社会学1 理論と方法』東京大学出版会, 15-64.
- 荻野昌弘編, 2002, 『文化遺産の社会学 ルーブル美術館から原爆ドームまで』新曜社。
- 大野道邦, 2010, 『可能性としての文化社会学』世界思想社。
- 佐藤俊樹, 2006, 「関のありか——言説分析と「実証性」」佐藤俊樹・友枝敏雄編『言説分析の可能性——社会学的方法の迷宮から』東信堂, 27-58.
- 盛山和夫, 2000, 『権力』東京大学出版会。
- 鈴木謙介, 2011, 「テーマ化される消費都市」『思想地図β vol.1』128-41.
- 多田光宏, 2011, 「社会の文化——世界社会の時代における文化の概念のために」『社会学評論』62 (1): 36-49.
- 高野光平, 難波功士編, 2010, 『テレビ・コマーシャルの考古学——昭和30年代のメディアと文化』世界思想社。
- 角田隆一, 2010, 「ノスタルジア映画をめぐる新たな快楽」遠藤知巳編, 『フラット・カルチャー——現代日本の社会学』せりか書房, 212-20.

(ささべ・たける 博士課程後期課程)